

タンゴの略歴

2024, 11, 24 例会資料、福田郁子

タンゴは、ヨーロッパのワルツ、アフリカのカンドンベ、キューバのハバネラ等をミックスしてできた音楽で、1870年～1880年頃、当時、ヨーロッパやスペインの移民たちが多かったアルゼンチンのブエノスアイレスで産み出され、初期のころは場末の安酒場で、主にダンスの伴奏として演奏されていました。

それから30年後1910年頃にはバンドネオン2、ヴァイオリン2、ピアノ1、ベースの6重奏がタンゴサウンドの基本となって、舞台やサロンで演奏されるようになり、1920年代には、今日有名なタンゴ曲のほとんどが歌としてヒットし、多くのタンゴ歌手が誕生しました。 そのころにはフランスのバリを中心にヨーロッパへ伝わり、各地の音楽家たちにより、そのリズムと形式をまねて作り出したのがコンチネンタルタンゴで甘美で感傷的な旋律の親しみやすさにより、ダンス音楽、サロン音楽として世界各地に流行しました。

それに少し遅れて1920年代末頃には日本にもレコードが入ってきて、桜井潔の楽団や、淡谷のり子等のタンゴ歌手を通じてダンスホールを中心に社交ダンスとして流行、発展し、戦争で一時中断したものの、戦後は民間放送を通じて拡大し、上野 銀座 渋谷 新宿等でタンゴ生演奏を聴かせる喫茶店が次々と開店、いわゆるカフェコンサート全盛時代になり、早川真平(藤沢嵐子)、坂本政一、西塔辰之助等の楽団を中心に54もの楽団が活躍しましたが徐々にタンゴブームが下火になりました。

丁度その頃、1960年代半には、アルゼンチン出身のバンドネオン奏者・ピアソラが 今までのタンゴに飽き足らず、音楽理論やクラシックやジャズを徹底的に学んだ末に、バロックやフーガ、ジャズのエッセンスを取り入れ、強いビートと重厚な音楽構造の上にセンチメンタルなメロディを自由に展開させるという独自の音楽形態を生み出し、タンゴの革命をはたし、一部にはタンゴの本流から外れるとの批判があるものの、今なお世界中で根強い人気を博しています。

★この「私の好きなタンゴ曲集2」には、1と同じく、これら全ての時代から少しずつ選んだ好きな曲を、日本、世界、ピアソラ等の順に並べさせて頂いています。